

池田先生の定年を迎えるにあたって

聞き手 高瀬 奈津子

——先生は、来春（二〇一三年三月）、定年を迎え退職されます。NHKを退職されてから、こちらに赴任されたのが二〇〇六年四月、七年間近いお付き合いですね。今日はNHK時代のことや、大学にいらしてからのことをうかがいたいと思います。

（池田） 高瀬先生とは研究室が同じ六号館六階。専任教員という仕事は初めてでしたので、いろいろ教えていただいたし、張偉雄先生や昨年退職された石塚純一先生も交えてよく食べにもいきました。高瀬先生は会話のあちこちにメディアへの関心がうかがえる、そんな先生でしたので、インタビュアーを買っていただきました。

——先生が放送記者になられたのは、一九七〇年、大阪万博の年でしたよね。私の母は「あなたがお腹にいたから万博に行きそだった」と今でも言います。

（池田） 大阪万博は、日本がアメリカに次ぐ経済大国になったことを世界に示した、日本では初めての万国博覧会で、興行的にも成功を収めました。一方で、人気のパビリオン（展示館）では二時間並ぶのは当たり前、炎天下に疲れ果てて座り込んでいる人々をたくさん見ました。高瀬さんのお母さんは無理をされなくて本当に良かったと思います。

私は、大学卒業後、東京世田谷区にあるNHK中央研修所で二ヶ月間の訓練を受け、記者職として大阪に赴任し

ました。万博は真夏の二カ月あまり担当しました。歴代の万国博は時代を象徴する科学技術を表示してきましたが、大阪万博の場合は、三月の開幕初日、原発の敦賀一号機からの送電で会場の明かりが灯りました。さらに八月には美浜原発からの送電も行われました。最先端の技術の光でしとし、原子力の平和利用としてメディアは高く持ち上げました。しかし、三・一一の東日本大震災を経験した今から考えますと、メディアはあまりにも樂觀的すぎました。あの時点でも、放射性廃棄物の処理に決定打が見つかってないことはわかっていたのですが、なんとかなるだろう、と。

もうひとつ、万博は九月に終わるのですが、その年末には、万博会場建設に駆り出されたあと仕事を失い収入の道を断たれた日雇い労働者たちの暴動が大阪西成区の釜が崎で起きます。ドヤ街と呼ばれるこの地区では、経済成長の陰で、使われて捨てられていく人々の一群が六〇年代初めから毎年のように暴動を起こしてきました。泣きつかれ、酒を飲ませながら彼らの話を聞いたことを覚えています。また、七〇年代は、突き進む工業化の負の面として各地で公害問題が生じます。大阪も白砂青松で知られた堺市から南の海岸に五〇年代末から工業地帯が作られ、漁業は衰退し、大気汚染が激しくなります。公害の被害者という、時代の変化で切り捨てられていく人々を見つめることになりました。

—— 池田先生は、国際放送にも長く携わられたと前に聞いたことがあります。

(池田) ええ、大阪、横浜と合わせて七年間地方局に勤務した後、東京に移り、国際放送を行う国際局勤務となりました。入局（入社のこと）時に、担当したい将来の業務について書いた際、等身大の日本を海外に伝える仕事への関心について触れたことも国際放送を担当した理由となったのでしょね。

国際放送は戦前に始まった短波のラジオの時代から、八〇年代以降、短波放送に加えて、衛星伝送を活用した映

像国際放送とインターネット配信と言う風に大きく変わりました。その変化を担うことになります。英語を読んだり話したりは好きでしたが、英語でニュースを書くことは別問題で、一からの勉強でした。ニュースは報道局から送られてくる日本語の放送を英語に直すことが主ですが、特集や解説などは自分たちで取材し、書き、出演もします。一時は日本語と英語でエッセイや時事解説記事なども書いて自分で読んで放送していました。もちろん、英語はライターと呼ばれたプロのネイティブが手助けをしてくれました。

八〇年代から衛星中継が世界各地を結び、各地の出来事が瞬時に飛び込んでくるようになります。その衛星中継網を利用して、欧米に番組を送り出すことが始まります。国際映像放送時代の到来です。途中、地方局でのニュースデスクも体験しましたが、アメリカへの発信ニュース番組で“Today's Japan”という三〇分のニュース番組(月金)のデスクを三年余りやりました。東日本大震災では、NHKの国際映像放送がインターネットでも流れ、世界中からアクセスがありました。今から思うとその土台作りをしたことになりました。

——研究者の道に入られたのは、どんなきっかけだったのですか？

(池田) 九〇年代になってからは、自分が取材するより統括役の方が多くなりました。もう一度、調査者、取材者に戻りたいという思いもあり、一九九七年末、京都で開かれた温暖化会議の国際放送特集の現地取材統括をした後は、NHKの放送文化研究所への移動を希望しました。九八年夏から、研究所のメディア経営部の主任研究員として、アメリカのメディア動向の調査を担当することになりました。

アメリカ担当を希望したのは、一九八〇年から八一年にかけて、ハーバード大学でジャーナリストのために設けられたニーマンフェローの会員として一年間を過ごし、彼らとの交流が続いていたことがあります。また、日本に先駆けてアメリカでは一九九八年一月に地上テレビ放送のデジタル化が部分的に始まることになっていました。

ら、放送文化研究所の研究者としては、その普及具合や、一〇年はかかるアナログ放送の停波への道筋など注視する必要があります。日本で見るとアメリカの放送局でハイビジョンテレビを見ていた方が多かったと思います。

また、放送のデジタル化も大きなテーマでしたが、アメリカではメディアの集中統合が進み異業種の企業がメディアを傘下に置くという状況も起きていました。「第二次世界大戦直後はメディアの所有者を全部集めると広大な舞踏場が必要だったが、今では、電話ボックスにつめこむことができる」と言われたような状況でした。「少数者によるメディア支配」は民主主義を支える「言論の多様性」とぶつかります。また、新聞、放送という既存メディアがインターネットという新しいメディアとどう取り組むのか、大きな問題が浮上していました。これらは、今も続く問題です。こうしたテーマを折に触れ、論文やリポートにまとめたのです。

今振り返ってみますと、「想定外」だったのが、二〇〇一年九月一日に起きた同時多発テロでした。アメリカ国民の憤りと報復への要求は、メディアを巻き込みました。「テロとの戦い」を掲げて、アフガン侵攻からイラク戦争へと突き進む政府とそれを支持する国民に挟まれて、メディアは委縮し、また国家による令状なしの盗聴は当たり前になり、移民の人権も抑圧されました。事件一カ月後の十一月と事件から一年後に研究所としての報告書をまとめましたが、表面は変わらないようなアメリカ的自由が、その底ではどう制限されたのか、もっと深掘りできなかったのではないかという思いは残ります。

—— 札幌大学に來られたのはどういうきっかけだったのですか？

(池田) 文化学部では、札幌テレビで要職に就かれていた所雅彦先生が一〇年間教べんをとられた後、退職されることになり、二〇〇五年秋に新任教員の公募が行われました。二〇〇六年の三月でNHKの定年を迎えることになっていましたので、応募をしたところ、採用していただきました。

当時、出版社の出身である石塚先生が出版関係の講義をされており、私は、所先生が教えておられた、放送メディア論や放送文化論、ジャーナリズム論を引き継ぎました。ゼミでは、二年生はドキュメンタリーの制作、三、四年生では、放送メディアやジャーナリズムを深く考える展開をしてきました。

——ゼミ紹介で学生さんたちがカメラを囲み撮影している写真を見たことがあります。ちょっとカッコよかったですよ。

(池田) 当初、撮影機材がなく学生支援オフィスに聞いたら、昔のハミリカメラしかないという返事でした。そこで、二年生のゼミは、すぐれたドキュメンタリーを見せて考えさせるゼミ展開にしたのですが、ある日、別の先生が受け持っていた一年生が尋ねてきて、映像制作をゼミでやってくれるなら、来年度は先生のところに来ます、というのです。自分で作ってみることでメディアを読み解く力がつくのは確かですので、急ぎよ、文化学部の先生方にお願ひして数人からビデオカメラを貸してもらい、当時の二年生にも後期から映像制作を教えました。この時の教訓は、実習を遅く始めたので、作品制作は、雪の中の撮影となってしまうことです。雪は見ている分にはいいのですが、その中の撮影はつらい。二年がかりでセミプロ用のカメラを四台購入してもらい、機材的にも楽になりました。雪の降らないうちに撮影を終えさせたいのですが、なぜか、雪の季節になって撮影に弾みのつく学生が多いのです。きっと、寒さが気にならないのではないかと、考えるようになりました。

——ゼミ生はドキュメンタリーのテーマはどんなものを選ぶのですか？

(池田) 本来、ドキュメンタリーは社会的視点をどう盛り込むかが問われます。ただ、新聞を読む学生が激減しています。また、どんなテレビ番組を見ているかというと、ニュースやドキュメンタリーより、圧倒的にバラエティ番組が多い。ですから社会的視点からテーマを探すよりも、身近の、たとえば「何とかのお店」のような話題に目

が向く傾向があります。

昨年度のゼミ生が作ったドキュメンタリーでは、四つのグループのうち三組が「お店」をテーマにしました。そのうちの一つは、アメリカ南部料理の店とその店に集まる音楽好きの人々を描き、わたしも好きな作品でした。人間が描かれていたからです。ただ、社会的視点を持つと言える作品は、一作品しかなく、夏に中国からの留学生三人が東北にボランティアに出かけたその記録でした。ちょっとさびしいですね。

——先生はいつもメディアの一番大切な役割はジャーナリズムだと話されていましたよね。

(池田) 前任者で一昨年亡くなられた所先生も同じようなことを言われていました。インターネットがもたらしたメディア融合の時代に入り、インターネットは既存メディアを補完するだけでなく、対抗軸としてもそのジャーナリズム性を強めてきました。原発事故の後、福島県から逃れ北海道に定住することにした女性が、「テレビや新聞を情報源にしていた人たちは逃げ遅れ、インターネットを使っていた人たちは、いち早く避難した」と発言しているのを聞いたことがあります。厳密な検討は必要ですが、人々がそう受け止めるような状況が起きたのだと思います。それに、テレビでは時間の関係で部分的にしか伝えない東京電力などの会見を、インターネットのニコニコ動画は、記者質問まで全てを現場から伝えるなど新鮮でした。

一方で、最近問題となった遠隔操作やフィッシングと呼ばれる詐欺的な商法に見られるように、インターネットは万人に開かれているのみならず、蛮人にも開かれています。安定し、情報の信頼性を高めていくのにはまだ時間がかかると思っています。既存メディアが荷ってきたジャーナリズムの役割は重要なのです。

ジャーナリズムの核心は何なのか、やはり、人々に周りの環境がどう変化しようとしているかを伝えることと、権力を監視することだと思います。その意味ではテレビより新聞の方がその役割を果たしている。一方でテレビは、

技術的には目覚ましい発達を遂げましたが、ドキュメンタリー手法を駆使したバラエティ番組は花盛りでも、ジャーナリズム性は希薄化しているのでは、と危惧します。

放送文化研究所時代に親しくなったアメリカの放送人のことを思い出します。

彼は、夫婦で相談をし、二人の子供たちには一四歳になるまで家では一切テレビを見せなかったそうです。その代わり、夫婦で子供たちの読み書きの能力を高めることに力を入れました。「二人は友達の家ではテレビを見ていたかもしれない。でも、今では、二人とも良き読み手、良き書き手に育った」と言った後、彼はこう言いました。
“Creativity requires isolation.”（創造力を高めるには孤独な時間が必要なのだ）。

テレビが子供の創造力を育てられるのだろうか、読んだり書いたりすることが創造力を養うのではないか。放送をできるだけ人に見せる仕事にあっても、彼はテレビへの警戒心を持っていたのだと思います。九・一一同時多発テロの後、アメリカのテレビ報道が政府に対する批判精神を失ったと彼がしばしば嘆いていたことと併せて、この三つの単語を使った一文を思い出します。

——今日は長時間ありがとうございました。